Reprint of Komyo Banashi(Volume2 Part2)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 江本, 裕[編] メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/139

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

大妻女子大学紀要―文系―　第四十四号、平成二十四（二〇一二）年三月

『功名咄』四（中巻ノ下）

江本　裕　編

本稿は東京大学史料編纂所・押小路文庫が所蔵する、写本『功名咄』（三巻六冊）のうちの巻中ノ下を底本として翻刻するものである。詳細な書誌は完結時に記すとして、本書は片仮名漢字混じり本、三巻（上・中・下）六冊、縦二十五・六糎、横十八・四糎。後補書題簽、左肩単辺。序文に「元禄八乙亥歳夷則（七月）下旬／哺盡莽記探西翁之」の署名があるが、探西翁が誰であるかはまだ突きとめていない。今稿に収める中巻ノ下は墨付四十三丁半（二二話）。目録はすべて「○○咄」（例外がある）で統一されている。

本『功名咄』は底本の押小路文庫本以外に、金沢大学附属図書館・北条文庫と、大洲市立図書館・矢野玄道が蔵する。二本とも片仮名漢字混じり本、大洲本は巻下ノ下を欠き、上巻表紙（書題簽下）に「堀部彌兵衛著」とある。三本ともほぼ同内容であるが、細部に若干の異同があり、それらを比較するに、三本とも原本とは言えず、三本に遡る祖本があると想定される。他に京都大学附属図書館蔵『武道摭萃録』二八三・二八四に、『功名咄』下ノ上・下二冊が収録され（平仮名漢字混じり）、また、明治四十一年十月刊『功名咄前編』（川口一雄校正・報行社刊）が、『功名咄』上巻を絵入りで翻刻し（ただし四八話のうち八話欠）、国立国会図書館と学習院大学附属図書館が所蔵する。

今稿の初稿は井高美妃（本学大学院修士課程修了）が作成し、それを江本が凡例を作成しつつ校閲した。従って最終的な文責は江本にある。当初、江本は、本書が別題の先行書の転写ないしは抄出ではないかと疑って調査を試みたが、管見の範囲、独自の武辺咄であるとの結論に達している。順次翻刻して、読者の判断を待つものである。

凡例

一　底本は東京大学史料編纂所・押小路文庫所蔵の『功名咄』（三巻六冊）の、中ノ下（四冊目）である。

二　翻刻にあたっては原本を忠実に翻字するように努めたが、通読の便を考慮して、概ね次の方針に従った。

1　本文各話で数箇所の段落を設けた（底本・他本とも段落はない）。

2　底本には句読点はないが、私に句読点を施した。なお闕字に関しては、二字空けに統一した。

3　本文の中で会話体となっている所、また心中思惟・格言と見なされる場面には「　」を付けた。

4　本文右傍には割書（時には左傍）があるが、当該箇所の下に〔　〕を付けて区別した。

三　漢字について

1　常用漢字にあるものは原則として現在通行の字体に改めた。
2　異体字・略字は原則通常の字体に改め、宛字は正常の文字が想定できる場合にはそのまま用い、難読なものについては平仮名・現代仮名遣いでルビをつけた。また原文は「衛」（数箇所では「ヱ」）、「類」、多く指示代名詞として用いられる「彼」を、殆どの場合「イ」・「类」・「皮」と略しているが、すべて「衛」・「類」・「彼」で表記した。
3　「篭」と「籠」、「砲」と「炮」は使い分けた。

四　仮名について
1　底本は稀に濁点を付し、殆どの場合濁点を付していないが、底本のままとした。
2　底本に用いられている合字「㐂」・「㐂」・「ㄱ」・「メ」に関しては、すべて「トキ」・「トモ」・「コト」・「シテ」と開いた。
3　底本の反復記号は「〻」・「〻」・「〳〵」であるが、これを「〻」・「々」・「〳〵」とした。
4　漢字の振り仮名（ルビ）は、底本は片仮名で付す。翻字にあたっては、底本に付す振り仮名は片仮名で付し、左訓については当該語の下に〔　〕をつけて示した。なお、難読と思われる漢字については、私に平仮名・現代仮名遣いで付した。

五　その他
1　底本は連続する漢字文字に「レ点・一・二点」を付す場合もあるが、当時の慣用として付していない場合が多い。原則底本通りとしたが、一部で付しながら、一部を略する場合がある際には、私に訓点を施し、その場合は（　）をつけた。
2　底本に衍字がある場合にはその下部にアステリスクをつけた。
3　底本で疑問に思われる表記もそのままに記し、本文の右傍に①②で示し、各話ごとにその末尾で、大洲市立図書館矢野玄道文庫本（略号「大」）、金沢大学附属図書館北条文庫本（略号「金」）との異同を示した。

付記　翻刻を許可された東京大学史料編纂所に、深甚な謝意を表します。

功名咄中ノ下目録（便宜、中巻下だけの目録を付す）

一　月心是乗坊咄
一　平野咄
一　山本文禅咄
一　原田咄
一　水野監物殿咄
一　糟尾咄
一　桜井咄
一　中西咄
一　岡　咄
一　笠間殿咄
一　屋中咄
一　松倉豊後守殿家老咄
一　堀尾帯刀殿咄
一　山中鹿之助咄
一　嶋津咄
一　中川瀬兵衛殿咄
一　小神野咄
一　某久弥咄
一　栗原咄
一　花義咄
一　屋中安達咄
一　蒲生忠三郎殿

（同じ題で咄が二つに分けられているものには、一つ書の「一」の下に、私に(1)(2)を付した。）

一　永録（ママ）、天正ノ比、武田信玄・上杉謙信戦ノセツ、信州方月心ト云ル禅僧、越後方是乗坊ト云シ禅僧、双方共ニ出陣シテ戦場ニ於テ組討シケルニ、彼是乗坊、月心ヲ取テ押ヱ、脇指ヲ抜テ首ヲ掻ントセシカ、見レハ月心、鎧ノ上ニ掛落（クワラ）ヲ掛タリ。故ニ是乗坊、「汝禅ニ非スヤ」ト云ハ、月心「月ヲ見テ指ヲサスコトナカレ」ト答。其時是乗坊、「剣刃上ノ一勺ハ如何」ト問。月心「江蘆一天ノ雪」ト答。又「解ノ後ハイカン」ト問ハ、「雨霰雪ヤ氷ト隔ツレト解レバ、同シ谷川ノ水」ト読シ。依之、助テ互ニ引退シト云々。

誠ニ、出家道ニハヤサシキ心繰也。覚有死生ノ境ニ臨テモ、少シモ恐懼ノ心ナク不レ為レ(ニ)動転(一)、吾常々修行セシ法問ヲ説破セシ所、如何ナル武士ニモ劣ル間敷者也。去バ、軍陣ニテ鎧ノ上ニ掛落ヲ掛タル武士ニ逢テハ、身ノ毛ヨタツテ怖敷思ト云昔物モ有。其故ハ、参覚ヲ仕テ掛落ヲ被免程ノ者ハ、第一生死ヲ放ル道理有ニ依テ、死ヲ不レ苦故ニ、不レ為レ臆不(レ)為ニ動転一。此故ニ剛強也。此謂欤。然ハトテ、掛落計ニ可レ恐ニハ非ズ。掛落ハ形也。武士タル者、半死ヲ放テ討死スルコト、誰ニカ劣リナンヤ。去ハ、唐土ニ魯国ト云州有。或時、魯君ヘ荘子ト云人被参ケル時、「魯国ニハ儒者多シ。其故ハ過半儒服ヲ着タリ」ト宣フ。其時荘子曰、「左有ハ国中儒徳ナクシテ儒服ヲ着シタル者ヲハ、忽ニ可レ被レ為レ誅由被仰付テ見給ヘ」ト云ヘハ、魯君「最」ト同シ給ヒ、其趣ヲ国中ヘ触給ヒ、其後一両日ヲ経テ国中ヲ改テ見給ヒケルニ、儒服ヲ不レ改シテ着タル者ハ、一両人ナラテハナカリシトカヤ。是ヲ以テ形ニ泥（ナヅム）コトナカレト云コトヲ可レ知。扨又、是棄坊ガ月心ヲ助シコト、出家ニハ左モ可有。武士ニハ忠少シト云ヘシ。其故ハ、公儀ヲ軽クシ自ノ愛ニ依テ敵ヲ助ルコトハ、忠少シト云ヘリ。最此所了得仕結（ママ）①ヘ。

①結→給（大・金）

一寛永十四丁丑歳、肥前嶋原一揆ノ時分、松倉長門守殿ハ江戸留守ニテ有シ。家老ニ田中宗鉄・岡本新兵衛・多賀主水ト云テ三人有シニ、一揆ノ奴原嶋原ノ城エ押寄ケルニ、岡本新兵衛ハ追手口ヲ請取、多賀主水ハ搦手ヲ請取、田中宗鉄ハ一ノ年老ナレバ、本城ヲ請取テ在シニ、家中ノ者共、妻子ヲ不残本城ヘ執入。我ハ城ノ土橋ニ居テ櫓（やぐら）門ヲ指塞、蝦（エビ）ヲヲロシ、鉾ヲ取テ宗鉄諸人ニ謂ケル様、「喩追手ヲ破①ニ責破一タリトモ、一度本城ヱトテハ不可入」ト云テ、鉾ヲ堀ヘ投入ケルト云リ。扨本城ノ虎口（こぐち）ニハ石火矢ヲ数多仕懸テ、若一揆責入ハ可ニ討払一支度也。扨又、家中ノ面々家ヲ明テ、妻子共本城ヘ入ケル侭、若野心ノ者有テ「火ヲ付ルコトモヤ」ト云テ、時②拾余人ニ仰テ、家中ノ家々ヲ見廻セケルニ、如案家中ノ若党、或家ノ納戸ニ入テ、燧（ひうち）ニテ焼付ケル所ヲ見出テ、則討捨ニ仕タリトカヤ。岡本新兵衛ハ追手口ニ有テ下知仕ケルニ、一揆烈ク責寄門ノ扉ヲ斧ニテ切破、其破ヨリ一揆ノ者共二、三人匍（ハイ）入ケル所ヲ、鑓ニテ突殺ケルト云ヘリ。

其時、若キ者共、新兵衛ニ向テ云ケル様、「郷人共ニカヤウニ被責付侍ルコト、余ニ無念千万ニ存ル所也。願ハ門ヲ被レ開侍レ。罷出一揆ノ奴原一々ニ責付侍ルヘシ」ト云ケレトモ、不レ及ニ返事一居タリケルニ、若キ者共達テ右ノ意趣ヲ云ケレハ、新兵衛、「扨ハ我等ノ下知ヲ聞給フ間敷欤。左有ハ分別有」ト云タリケレハ、若キ者トモ云ケレ③ハ「可レ漏ニ御下知一アラサレトモ、郷人共ニ被ニ責付一侍ルコト余ニ無念ニ侍ル侭、覚ハ申侍ル」ト云ハ、「左有ハ我等ノ下知ヲ御待候」ト云テ、櫓ヨリ二拾目、三拾目、五拾目計ノ鉄炮ヲ揃テ、一揆ノ奴原ヲ討スクメケル故ニ、是ニ擗易シテ少引色ニ成ケル所ヲ、新兵衛見澄シテ、侍共ニ向テ云ケルヤウ、「時分ハ善シ。併永追ハ必無用也。永追仕給ハヽ、門ヲ閉テ各ヲバ捨殺侍ルソ。夫ヲ恨給フナ」ト云テ、門ヲ開テ追払。扨一町余迄追テ、早々引入ケルト也。其後ハ、堅ク城ヲ守テ不レ出、一揆共ハ以前ニコリテ不寄ト也。

然ルニ、肥後国細川越中守殿、近国也ケルニ依テ加勢ヲ乞、「此城ヲ預置以手勢一揆共ヲ不残討執ヘキ」由議定仕ケレトモ、細川殿ノ家老共返事ニハ、「公儀ヨリ無御下知シテ兵ヲ動（うごかしむる）ルコトハ、御法度ト被仰出上ハ難成」ト也。依之、手勢計ニテ兵ヲ出シテ一揆ヲ責討時、一揆指違テ城ヲ攻ハ可レ危コトヲ思テ、徒ニ送（ママ）数日（ヲヲ）ニケルト云リ。細川家ノ家老ハ、豊後ニ公儀ヨリ御目代両人御在（ヲワシ）ケルニ、此旨ヲ相尋ケルニ、「此方ヨリ指図ハ難成。其方分別次第」ト有儀也。依之、加勢ヲ不遣ト云リ。去間十月廿六日ヨリ極月上旬迄、徒ニ数日ヲ送ケルト也。此間ニ一揆共有馬ノ古

城ヲ拵テ楯籠ケルト云リ。彼豊後ニ被居ケル御目付両人ハ、此指図悪敷ニ依テ、以後公儀ノ首尾悪カリシト云々。

去ハ、松倉長州ハ言語同断ノ悪人成ケレトモ、親父豊後守殿勇気甚シク、智有人ニテ御座在ケル故ニ、家老共ニハ善人ヲ持給セ④ケルト也。田中宗鉄カ本城ノ門ヲ閉テ鉾ヲ堀ヘ投入テ捨ケルコト、兵一致ニシテ敵ヲ能防カセント思フ所ニ有。喩ハ、大河有ニ敵地ニ軍勢ヲ渡ノ橋ヲ焼落シ、舟筏ヲ切流シテ兵ヲ死地ニ堕入テ敵ヲ防コト、古ヨリ名将ノ作略也。次ニ又、地下一揆ナレバ、家中ノ僕従モ無心元ト思テ、家中ノ明家共ヲ為見廻タルコト、誠ニ、角急ニ閙敷（さわがしき）時分能思附タル物哉。勇智兼備セルコト勿論也。又、岡本新兵衛家中ノ若キ侍共カ「可討出」ト云ケルヲ制シテ不出コトハ、若一揆ノ奴原思切テ紛入、城内ニ掛火コト有ハ危カルヘシト思フ所アリ。一揆ノ奴原ヲ鉄炮ニテ討スクメ、引色見ヘケル所ヲ門ヲ開追払、早々引入ケルコト功者也。永追セサルモ敵ノ若返シ合ルコト、又ハ敵ノ紛キ⑤入ナンコトヲ思可ニ有。誠ニ、善仕様也。常々智勇ヲ嗜ズンバ覚有時ニハ当惑シテ何事モ不可出。又、搦手モ烈ク責ケルト也。然トモ、委ク不聞。依テ不書。

又豊後ニ被為置タル御目付両人ノ指図、武士道不案内ト云ヘシ。其故ハ、御下知ナクシテ私ニ兵ヲ不動ト云コトハ、無為・無事ノ時ノ掟也。覚有珍事ニ為二公儀一兵ヲ動スルコト、何ニ依テカ可レ為二御法度一。此所ヲ分別シテ見給ヘ。又、細川家ノ者共モ勇智ナキ故ト被レ思侍ル。勇智ナキカ故ニ、事ヲ左右ニ寄タル者也。其後、嶋原ノ城ヲ不出コトハ城ヨリ二・三里程モ遠キ山上ニ籏共数多打立テ見ケル程ニ、陣取ケルカト思ヒ、忍ノ兵ヲ以テ見届ケル所ニ、彼山上ニハ人一人モナクシテ四・五丁脇ノ渓ニ大勢集居タリ。是ハ定テ彼山ニ一揆有ト見テ軍勢ヲ出ハ、指違テ城ヲ可乗取トノ計略ト案シテ不出ト也。此旨一々思量仕給ヘ。

①破→被（大・金）。②時→侍（大・金）。③レ→ル（金）。④セ→ヒ（大・金）。⑤キ→レ（金）。

一

万治三癸卯（みずのとう）歳、堀田加賀守殿一男上野介殿、諫言ノ巻物一巻献上有テ、我居城下総ノ佐倉ヘ引籠給ケル。然レトモ、公儀ニ是不レ祝①思召ケルニ依テ、上使ヲ被レ遣テスカシ出テ、上野介殿舎弟那須美濃守殿ヘ被レ成二御預一、下野国那須ト云所ヘ被超ケル。夫ヨリ又、舎弟脇坂中務少輔殿ヘ被レ成二御預一、信州飯田ヘ移給ヒシ。然ニ、其前方上野介殿、平野権平殿対談ノ節、遠州ノ御一族在ハ一人御越候ヘ。可二召抱一ト也。依之、故遠州ノ舎弟平野弥二右衛門長子細川氏ニ勤仕シテ、九州肥後ニ在リ。其子ニ助五郎ト云テ、生年十五才ニ成ケルヲ契約シテ呼上セケル折節、上野介殿如レ右ノ様子ニテ佐倉ヘ引籠給フ由ヲ、彼助五郎摂州大坂ニテ聞ヌ。其節、平野権平殿、和州ノ知行所ニ居給フ故、彼地ニ行向テ権平殿宣ケルハ「扨々不仕合者哉。無是非、是ヨリ肥後ニ被レ下」ト也。其時、助五郎云ヤウ、「我等儀未タ御目見ヘヲモ不仕ト云ヘトモ、最早主従ノ契約ヲ仕タル上ハ左様ニハ難レ成。関東ニ下テ御用ニ無レ之ハ、各別御草履取ニ成トモ御奉公可仕」ト云。権平殿聞給ヒテ、「不謂コトヲ云物哉。是ヨリ直ニ筑紫ヘ被レ下侍レ」ト也。助五郎云ヤウ、「何ト被レ成二御意一候テモ、一旦是迄参タリ。御草履取也トモ被二仰付一侍レト不レ云シテ、肥後ヘ罷下リ侍ルコトハ非二武本意一」ト云。権平殿宣ヒケルハ、「世忰ノ不レ云コトソ②云モノ哉。我等次第ニシテ筑紫ヘ下リ候ヘ。流人ニ被仰付タル人ヘ奉公人ヲ肝煎コト御公儀ヘ対シ悪シ。是非関東ヘ下リ侍ハ我等ハ義絶也」ト宣ヒケレトモ、不レ聞シテ江戸ヘ下リヌ。扨、御籏本衆ニ何某殿トテ親類ノ有ケルニ此旨ヲ云ケレバ、此人モ一旦ハ留給ヒケレトモ、助五郎達テ道理ヲ云ケレバ、如何ニモ最至極也。左有ハ御横目衆ヘ可添二書状一ト有テ、信州飯田ヘ被レ遣。然ルニ、飯田入口ニ番所有テ不入。其時助五郎番ノ侍ニ向テ云ヤウ、「我等儀ハ平野助五郎ト申テ覚有者ニテ侍ルカ、上野介様ヘ被仰上、御草履取ニ成トモ被召置侍ハ御奉公可仕」ト云。番ノ侍共此旨ヲ聞テ感涙ヲ流テ、「扨々可二申入一様モ無レ之御心底哉。上野介様エ

ハ委細ニ可ニ申達一間、先御帰侍」ト云トモ不レ帰。「其御返事ヲ不レ聞シテハ不レ帰シ」ト云。「近所ニテ宿ヲ可レ借」ト云ヘトモ、「惣別法度也」ト云テ宿ヲ不レ借。依レ之、番所ノ侍ヲ頼、「宿ヲ被(二)仰付一被下侍レ」ト云ヘトモ、「此方ヨリ云付ルコトハ不成」ト云。助五郎云ヤウ、「左有ハ御返シヲ承ル内ハ御番所ノ軒ノ下ニ成トモ可罷在」ト云テ不去。依之、番ノ侍共モ其志ヲ感信シテ、則上野介殿ヘ此旨通達ス。上野介殿、其志ヲ感給フ。乍去、配所ノ人数極リヌ。唯今迄在シ者ヲ放シテ、其方ヲ召遣コトモ難成間、此所ヲ了簡シテ被帰侍レト也。助五郎此旨ヲ聞テ、「此上ハ兎角ヲ非レ可ニ申上一」ト云テ帰去ヌ。其後、程ヲヘテ本多下総守殿、此段ヲ被(レ)及ニ聞召一、知行二百石ニテ被ニ召出一ヌ。其後、次第ニ立身シテ其名ヲ改テ平野勘ケ由ト名乗テ、宣シキ役儀ヲ相勤ケルト云々。

誠以、上野介殿若サニ其時節ト不レ計諫言仕給ヒシニ依テ、其節ハ偏ニ狂人ノ取沙汰ニ成ケレトモ、以後公儀ノ御仕置等改給ヒシコトトモ多カリシト云リ。然ハ、一円ニ道理ナキ儀ニモ非ト云コトヲ知ヘシ。又、平野助五郎カコト、未若輩成者ノ奇特千万成心操③ト云ヘシ。其身ハ不及申親ノ心底迄奥深ク被思侍ル。人ノ父トシテハ第一以教慈トス。我家ノ道ヲ不レ教シテ、其身ノ心侭ニ養育スルコトヲ姑息ノ愛ト云テ、午ノ子ヲ育ヌルニ喩テ儒道ニ嫌コト最也。助五郎ガ義ヲ立タルニ依テ、親父迄義理深被思侍ル。又、権平殿留給ヒシコトハ、公儀ヲ重ク被存所也。依之、一入助五郎カ義理強ク聞侍ル人ハ、難ニ不レ逢ハ其善悪難顕ト云シコト、是也。誰々モ如レ此義ヲ守テ、主人エ可レ為ニ勤仕一コト勿論也。此旨思量仕給ヘ。

①祝→三本共に「不祝」だが、「よろこばず」と読むべきか。②ソ→ヲ（大・金）。③バセ→ハセ（大）、金はルビなし。

一 関ヶ原合戦ノ最初、水野惣兵衛殿ハ参州加里屋ニ居住仕給フ。然ルニ、堀尾帯刀殿ト諸事可(レ)有ニ評儀一由ニテ、尾州池鯉鮒ニテ出会給フニ、又其比牢人者ニ加々野柄弥八ト云者アリ。此者モ常々　権現様被レ掛ニ御目一者也ケレバ、帯刀殿、弥八ヲモ同道有テ惣兵衛殿ト諸事可為評定トテ被為参会ケルニ、其夜ニ入テ弥八刀ヲ抜テ、惣兵衛殿ヲ切ル。帯刀殿モ抜合テ戦給フト云トモ、数ヶ所手ヲ負給フ所ニ、惣兵衛殿家頼共勝手ヨリ出合ケル侭、帯刀殿燈ヲ消、壁ニ添テ立隠テ亡難ヲ避給フ。其内ニ弥八ヲハ惣兵衛殿家頼共討取死タリ。其時帯刀殿、惣兵ヲハ加々野柄弥八ガ討ヌ。火ヲ為レ出ト呼ハル。則火ヲ出シケル。帯刀殿ニ数ヶ所手負給フヲ、帯刀殿ノ僕従トモ肩ニ掛テ旅宿ニ帰リケルニ、道ニテ帯刀殿宣ヒケルハ、「弥八カ懐ニ鼻紙袋ヤウノ物有ベシ。取テ参ルヘシ」ト也。則取テ来リヌ。如案弥八カ鼻紙袋ノ内ニ石田治部少方ヨリノ書状アリ。其状ニ曰、「水野惣兵衛・堀尾帯刀両人ノ内計①テ西方ヘ来ハ、知行一万石可レ給」由也。依之、加々野柄弥八カ討シコト為レ不レ云分明也ト云々。

誠ニ此帯刀殿数ヶ所手負給フテ、僕従ノ肩ニ被レ掛ナカラ、能思出給フ物哉。無ニ勇智一被ニ思出一マジ。帯刀殿、加々野柄ヲ同道有シニ依テ、以ニ　権現様可レ有(二)御疑一コトヲ思出給フコト神妙也。又、壁ニ添テ亡難ヲ遁給ヒシコトハ、元来帯刀殿、織田信長公ノ忍ノ者ニテ有シト也。其時分、或城郭ヱ忍入ケルトテ、堀ヲ越ケル時、城内ヨリ猿②火ヲ下シテ見ケルニ、堀底ニ有藻ヲ首ニ被テ隠居テ、給③ニハ忍入ケルニ依テ、堀尾茂助トハ名付ラレタリト云リ。其故ニ、此時モ隠兵ノ術ヲハ出鉛④フト云リ。

①計→討（大・金）。②猿火→この語未詳→大は悵火、金は猿火。③給→終（大・金）。④鉛→給（大・金）。

一 堀尾帯刀殿、関ヶ原合戦以後、雲州一国拝領有テ後、山本文禅ト云者アリ。此者牢人ニテ有シカ、元来山中鹿之助カ家頼ニテ、数度ノ覚有武功ノ者ナル由ヲ被レ及一聞召一ニ。則彼①召出ニタリ。扨、

或夜帯刀殿、彼文禅ヲ御前ヘ被召、山中鹿之助ガ剛強ナル働共被レ語聞カント所望仕給ヲ、文禅カ云、「鹿之助カ働、殿様ナトノヤウナル御武功勝タル御前ニテ語リ申ヤウナル儀ニテ不レ侍」ト卑下シテ終ニ不レ語ト云リ。其座ノ興ヲ覚ヌル躰也。扨、後日ニ近習ノ者彼文禅ニ逢テ云ヤウ、「何トシテ先日ハ彼程ニ御所望有シニ語給ハヌゾ。不審ニ侍ル」ト云ヘハ、文禅カ云ク「去ハトヨ、山中鹿之助ハ剛強第一ノ者也トハ云トモ、我古主ナカラ死際悪シクシテ犬死同前ノ儀也。人ハ死期ヲ以テ第一トス。故ニ不レ語」ト云シ。此故ニ文禅ヲ弥深ミ思ヒケルト云々。

誠ニ此文禅カ云シ如ク、人ハ第一ニ死期ヲ大事トス。去ハ、斎藤別当実盛ハ不二心成一富士川ヨリ逃登ケルコトヲ恥テ、北国篠原ニ於テ討死仕タリケレバ、誰カ富士川ニテ臆シタリト云ヤ。去ハ、山中鹿之助ガ武功ヲ最初ヨリ謂続ヌル時「扨死期ハ如何」ト尋給フニ、不レ語ト云コトモ成間敷。若又語続ル時ハ、初語シ功ハ皆水ニ成ス②ヘシ。左有バ、不レ語ニハ不レ然ト思所最也。此文禅ハ数度ノ武功有シ上智有兵ナレハ、者ノ頭ニモ成ヌベシ。然ハ、武ノ内ノ重宝也。此旨思量仕給へ。

①彼→被（大・金）。②ス→ヌ（大・金）。

一

山中鹿之助ト云者ハ、尼子ノ晴久ノ家臣ニテ剛強ナルコト近国ニ無隠。然ルニ、安芸ノ毛利元就ヨリ以謀被招ケルニ依テ、主ノ晴久ヲ殺テ安芸ニ趣ク。元就ヨリ殊之外被為馳走ケルニ、其馳走人ニ岡筑前ト云者ヲ被付ケル。此筑前モ数度ノ場数有武士也。然トモ、此筑前小兵者ナリケルヲ、鹿之助ガ云ヤウ、「去ハ、聞ト見トハ違物也。岡筑前殿ト云テ数度武功有由、他国ニテ聞及シ時ハ、定テ大兵ニテ可レ有ト思タリ。然ルニ今見侍ハ無左」ト云ケレハ、筑前ガ云ク、「去ハコソ聞ト見トハ違侍ル。剛強第一ト聞シ鹿之助殿ナトノ、今如此主ノ晴久ヲ奉レ殺可レ被レ為二降参一トハ不レ思シ」ト云ケレハ、鹿之助聞之テ涙ヲ流シケルト云リ。其外ニモ、諸事不二心行一思フ事耳多カリケレハ、上方ヘト志シテ登ケルニ、毛利家ヨリ馳走顔ニテモテナシ、道々迄人ヲ付テ上セ給フ内ニ、備中国川辺川ト云船渡ニテ、馳走人鹿之助家来共ヲ先ヘ渡ケル内、鹿之助ハ狭箱ニ腰ヲ掛テ在シニ、馳走人、僕従共ヲ渡シテ戻船ノ時、川岸四、五間程ニテ取脱タル躰ニテ船ヨリ落ル。人々「ヤレ〳〵」ト云時、鹿之助ガ居タリケル近辺ノ川岸ニ匍上ル人々、「刀脇指ニ可二水入一」ト云バ「如何ニモ」ト云テ刀ヲ抜テ、其侭其刀ニテ鹿之助ヲ討タリト云リ。又一説ニハ、渡船ノ馳走人「其船侍候ヘ」ト云テ、編笠ヲ以テ招キケルニ、鹿之助モ向ノ船ニ心ヲ移シテイタル所ヲ、脇指ヲ抜テ鹿之助カ右之腕ヲ打落ケル。鹿之助剛強也ト云トモ、利腕ヲ打落サレタルニ依テ、何ノ無二造作一被討ケルト云々。

去ハ、大兵ノ者、小兵ナル者ヲ嫚テ不覚仕ヌル様多シ。然トモ、岡筑前カ云分モ善ニハ非ズ。其故ハ、主人ノ馳走有人ヲ覚恥シメヌルコト忠少シト云ヘシ。扨又、此鹿之助、毛利家ヨリ謀略ヲ以テ被レ計ケルニ迷テ、主ノ晴久ヲ奉殺シコトヲ、今此筑前ニ被レ恥テ磕ト行当後悔セシニ依テ、不レ覚涙ヲ流セシト見ヘタリ。

去ハ、主人如何ニ積悪ノ人也トモ云ヘ、対二主君一為敵コトナカレ。有恨時ハ、所ヲ去ヲン迄ヨ。又ハ、出家遁世コソカヤウノ時能遁所ナルベシ。古今主人ニ有レ恨者、任二血気一害レ生一生ノ間恨思ヒ、其子孫ニ其積悪ノ名ヲ伝ヘ、面ヲ穢コト、如何ニ其身ニハ悔シク悲カルラン。此鹿之助モ常々剛強第一ノ者ナレハ、定テ一旦ノ迷ト血気ニテコソ晴久ヲバ殺ケシテ、今此時ニ至ハ、腹ヲ寸々ニ被レ断思ヒナラメ。去ハ、一生不善ニシテハ活テモ無益、面白カラズト大丈夫心ヲ発シ給へ。又、鹿之助ヲ討シ者ノ武略ハ、両説トモニ能仕様ト云ヘシ。覚有剛強ナル者ヲ討ニハ、何ニテモ其便ヲ求テ討コト最也。軍タチニ九死一生ノ戦ヲスルニモ、先レ謀、戦コトヲ後ニスト云リ。

一　延宝ノ初ノ比、越後村上ノ城主、榊原弐部少殿家老ニ、原田権右衛門ト云人有。年七十余才也ト云トモ、常ニ若キ者共ト立交テ鑓ヲ稽古仕ケル。夫故、鑓モ能遣覚給ヒシ。然ルニ、或者云ヤウ、「最早御年モ善シ。鑓モ能遣給ヘバ、今ヨリ養老楽ヲモ仕給ヘカシ」ト云バ、権右衛門カ云ヤウ、「吾鑓ヲ稽古スレトモ、全ク鑓ヲ仕上ヘキト思フ心入ニテモナシ。年老ヌレハ自ラ行歩モ不自由ニ、身力モ弱リヌ。如此稽古ヲスレバ、自ラ身モ達者ニ成、五丁・十丁ノ道ヲ行ニ不労。此故ニ常ニ不絶稽古ヲ仕侍ル」ト云リ。依之、榊原ノ家中面々思ヤウ、「諸人武芸ニ怠リ有ニ依テ、覚仕給フ者ナラン」ト云テ、老若共ニ武芸ニ精ヲ出シケルト云々。

誠ニ、此権左衛門ト云人ハ智勇有人ト見ヘタリ。去ハ、世ノ中ノ愚ナル、又ハ勇力ナキ男、安楽ヲ好テ徒ニ身ヲ置コトヲ宗トス。武ノ家ニ生レン者、何ソ楽ヲ好テ徒ニ身ヲ置、武ノ道ヲ忘テ有ランヤ。武ノ道ヲ忘テ万一珍事出来ン時、万代不易ノ其名字ニ汚名ヲ残コト何ソ武ノ本意ナラン。去ハ、尾州小野沢五郎兵衛ト云人モ、年老給フテ後モ常々馬ヲ責給ヒシニ依テ、若キ者共ノ云ク、「年老給ヒテ不レ被レ謂コト也。若キ者ニ為レ乗給ヘカシ」ト云ケレハ、五郎兵衛被云ケルハ「全ク其理ニ非ス。常ニ馬ヲ不レ乗ハ、偶乗ヌル時、胯スクミテ行歩不自由ナル者也」ト云テ、不レ絶馬ヲ責給フト云リ。名ヲ得タル人ハ、如此割符ヲ合スルカ如ク也。武ノ家ニ生レン者、日夜旦暮ニ身心ヲ責テ以テ善トス。安楽ヲ求好ヲ以テ愚トス。出家モ又然ル也ト云ヘリ。殊更人ノ官タラン者ハ、諸人ノ手本共成者ナレハ、武ノ道ニ不レ怠、武芸ヲ好ム時ハ、此原田カ如ク忠モ自ラ其内ニ備ヘキ者也。此旨思量仕給ヘ。

一　永禄・元亀・天正ノ比、九州薩摩武士ニ嶋津武蔵ト云者アリ。此者ハ数度有二武功一者也ト云リ。然ルニ或時、嶋津方討負テ敗軍仕ケル。諸人、「武蔵殿、何ト返シ給ハスカ」ト云ケレバ、「イヤ〳〵爰ハ可レ為レ返所一非ス。退給」ト云テ、広野ノ内ハ混引ニ引退ケル程ニ、六丁一里ノ道ヲ五・六里退テ畷道ヲ過テ橋ノ有ケル所ニテ、「爰コソ善所ナレ」ト云テ、踏留テ退テ来ル軍勢ヲバ通シ、追テ来ル敵ヲ待受テ「嶋津武蔵」ト名乗テ鑓ヲ入ル。是ヲ見テ勇気有兵共取テ返シケル程ニ、又二・三里カ程追討ニ仕タリト云々。

誠ニ、此武蔵功者ト云ヘキ者歟。若広野ニテ返ス時ハ、味方負軍ナレバ敵我後ロヘ廻テ不レ為二討死一ト云コト有ヘカラス。去ハ、敵モ最早永追シテ追労タル比ナレバ、無レ左共追捨テ可二引返一気ニ成ヌ。其上、畷道ニテ不レ成二大勢一一騎打ニ成来ル所也。去ハ、兵書ニモ「帰ル気ヲ討」ト云口伝ニ能叶者歟。覚有道理ヲ知テモ無レ勇不レ可二思出一。無智不レ可レ知。智勇兼備セルコト勿論也。其上、常々鑓兵法ヲモ仕覚、喩ハ敵大勢ノ中ヘ一人馳入テモ、タヤスク不レ被レ討ヤウニ嗜テコソ、如此大功ヲハ達スヘケレ。常々怠リニテ暮シナハ、如二武蔵一知レ図返シタリトモ可レ為二討死一ナレバ、大功ヲハ難達。去ハ、常々鑓兵法ニ達シテ覚有時討死ト思定テ懸入テコソ、実死一生ノ内ニ大功ヲハ達スル者ナレ。此旨能々勘弁仕給ヘ。

一　明暦三丁酉歳正月十九日・廿日両日、江戸中悉ク焼失ス。人拾万余人焼死トハ云トモ、是ハ町方計ノコト、「諸大名屋敷ニテ焼死ケルヲハ外聞悪敷」ト云テ、隠密セラレケルニ依テ、不レ知ト也。御城モ不残焼失故　公方様ニハ西ノ丸ヘ被レ為レ成二御渡一ケル。然ニ、常々御普代衆諸方門々ヲ堅メケル役所有ケルニ、何モ遅参也トテ、同廿一日ニ彼面々ヲ西ノ丸ヘ被レ召ケルニ、水野監物殿ハ、方々親キ方ヘ被見回ケルニ依テ、遅カリシニ、松平伊豆守殿、「監ハ後ニモ被仰渡侍レ」トテ、御老中列座ニテ被仰出ケルハ、「今度大火事ニテ有レ之候所ニ、面々請取ノ場ヘ遅参ノ段、近比不届被思召間、以後覚有儀有時被レ致二遅参一侍ハ、遠嶋ニモ可レ被二仰付一旨上意也。其段被二相心得一侍レ」ト也。何モ「謹テ奉レ得(二)

其意(一)」由ヲ申上ル。然ル所ニ、監物殿モ着座仕給フ。伊豆守殿ハ少心易枢機有ケルニ依テ、「何方ヘ被レ参タルゾ。是程ニ待兼最早何モヘハ上意ノ趣申渡侍リヌ」ト宣フ。監物殿、「扨如何様ナル儀ニテカ侍ル」ト云ハ、右ノ趣ヲ被仰出ケル。堅物殿傍ヘ向テ、「扱①如何様ニカ御請ヲハ被仰上侍シ」ト云ハ、伊豆守殿アザ笑テ、「監ハ扨如何云ヘキトカ被レ思侍ル」ト宣フ。其時監物被レ申ケルハ、「上意ノ趣、先以奉畏侍ヌ。併我等ノ存寄候トハ各別ノ議也。我等常ニモ又今度モ家来トモニ申付侍ルハ、必々急侍ルナ」ト云テ、屋敷ニテ兵狼ヲモ為遣候ヒテ、「腰兵糧ヲ持タルカ」ト穿鑿仕リ、「扨下々迄皆揃侍ルカ」ト云テ、皆揃テ後、馬ニ乗テ罷出ニモ、「静ニ々」ト下知仕テ、馬ヲ引留々乗テ罷越侍ル。其故ハ、唯今ニモ何コトモ侍ハト存知、不レ労ヤウニト存侍ル問②、向後トテモ遅コト侍ルヘシ」ト云ハ、御老中モ兎角ノ儀ヲ不宣。最前御請申シ人々モ是ヲ「最」ト存ラル、顔色也。此故ニ、何モ見合テ退出スト云々。

誠此監物殿ハ、常々軍術ヲモ知了仕、心掛好人也ト云リ。其上智勇有人ニテコソ有ケメ。覚有時節モ其趣ヲ潔ヨク被云ケルコト、時ニ執テノ高名也。去ハ兵書ニ、「備ハ門ヲ出ルヨリ敵ヲ見ガ如クス」ト云リ。此備ト云ハ、常々ノ嗜ヲ云ト也。刀脇指ヲ様(わき)テ思ヤウニ拵テ指モ備也。其外、鑓ヲ稽古シ、弓ヲ射習、鉄炮ヲ打、武具ヲ調置、皆以テ備也。門トハ武家ニ生出ルコトヲ云也。武門ニ生シ者、此旨思量仕給ヘ。

①扱→扨（大・金）。②問→間（大・金）。

一 元亀・天正ノ比、織田信長公ノ幕下ニ羽柴筑前守殿、摂州退治仕給フニ、摂州茨木ノ城主ニ和田ノ何某ト云者有。此人常ニ月毛ノ馬ヲ秘蔵シテ持ケルヲ、スワウト云物ヲ煎シテ常ニ湯洗ヲ仕テ赤ク染タリ。故ニ世人、其時分和多カ染月毛ト云ケルト也。然ルニ筑前守殿ト毎度戦給フニ、或時、筑前守殿侍共之常ニ誥(つめ)テ居ケル座敷ニ、「明日ノ合戦ニ和多ヲ討取タラン者ニハ知行千石宛行ヘシ」ト云張紙ヲ仕テ置給ヒシヲ、諸人是ヲ見テ「明日誰カ討取ヘキ」ト云テ見居タル所ニ、中川瀬兵衛ト云人、其比知行二百石計執テ居給ヒケルカ、是ヲミテ其侭引メクリ取給ヒケレハ、「是ハ如何ニ」ト諸人云ケルニ、瀬丘被云ケルハ、「明日我ナラデ和田ガ首ヲ可執者ヲ不レ覚」ト被云ケルト也。其時諸人私語ケルハ「扨々笑敷(おかしき)コト哉。瀬兵衛ガ分トシテ彼ノ多勢ヲ持タル和田ヲタヤスク可討取イワレナシ」ト云テ、目口ヲ引テ笑私語ケルト也。

然所、瀬丘①明ル日未明ニ具足ヲバ態ト不レ為レ着、足軽ノ着ル羽織ヲ着シ、鉄炮一挺持テ、喜四郎殿ト云ケル舎弟一人召具シ、毎モ敵人数ヲ押来ケル野原、井溝ノ内ニ匍入、柳ノ木陰ニ隠居テ相待ケル所ニ、和田ハ如レ毎彼染月毛ニ打乗テ、軍勢ヨリ一・二町先立テ輪ヲ乗廻シ々々押来ル所ヲ、近々ト待受、鉄炮ニテ討落ス。其時、舎弟ノ喜四郎走出テ首ヲ捕ル。敵ノ軍勢是ヲミテ、不及合戦敗軍仕タリトカヤ。是ヨリ瀬兵衛殿次第ニ立身仕給ヌ。其後、明智日向守叛逆ノ時分、於山崎大功ヲ顕シヌ。其後、江州志津岳ノ合戦ノ時分、於柳瀬討死仕給ヒケルト云リ。然トモ、此功ニ依テ干レ今其子孫中川山城守殿ト云テ、豊後岡ニテ七万石ノ領主タリ。此瀬兵衛殿中川家ノ元祖也ト云々。

誠ニ此瀬兵衛殿剛強ナル人トミヘタリ。然トモ、無レ智シテ覚有大功ヲバ難遂カラン者歟。其故ハ、敵ノ和田ガ常ニ深②月毛ニ乗テ軍勢ニ先達テ来ヲ見テ、我覚仕テ討取ンモノヲト思テイ給ヒケル故ニ、張紙ヲミルト被執タル者ナラン。是智謀ニ非スヤ。去ハ、筑前守殿モ此道理ヲ見付給フニ依テ、家来ノ侍共ノ智ヲ引見給シ③ガ為ニ、張紙ヲハ仕給ヒツラン者歟。又、具足ヲ不着給コトハ、身軽ニ掛引ヲセン為也。以後、柳瀬ニ於テ討死仕給フコトハ、敵猛勢ナレハトテ落散スルハ武ノ道ニ非ス。近キ味方ノ不レ為ニ助力一シテ討死セシハ不及是非所也。此旨思量仕給ヘ。

①丘→兵（金）。②深→染（大・金）。③シ→ン（大・金）。

一　元和・寛永ノ比、蜷川山城守殿家頼ニ、糟尾治部左衛門ト云者有。此者或時、下総国日光今市ト云所ヘ行テ、不慮ニ喧諍ヲ仕出タリ。然ルニ、相手方ヘ与力スル者拾三人有シニ、治部左衛門、元来不敵ナル男ニテ少シモ不動、刀ヲ抜テ会尺（アイシライ）テ五・六間引退ク。相手ノ者共恐懼シテ退クソト心得テ、勇ンテ一人掛来ル所ヲ出向テ、手ノ下ニ切伏タリ。又五・六間引、後エ敵ノ不廻所ニ息ヲ休メイタリ。然ルニ又、敵ノ内ニ勇気有男一人追テ来ル所ヲ、走向テ切伏タリ。扨又、最前ノ如ク五・六間引退テ待イタリ。敵モ是ヲ無念ニ思ケルガ、衆ニ勝レ進テ来者ヲ手ノ下ニ切倒タリ。如此七人迄切伏タリ。是ニ恐テ重テ追テ来者ナカリケレバ、治部左衛門素ヨリ道達者ニハ有、早々蜷川ニ帰リケルト云リ。此治部左衛門ハ齊藤播磨ト云テ、塚原ト伝カ伯父ニ兵法ヲ伝受仕タリ。其後、桜井大隅・其子櫻井大炊助両人ニモ稽古仕テ、兵法勝テ上手也シト云。

誠ニ、此治部左衛門、如何ニ兵法勝テ上手也ト云トモ、其機転悪ハ、覚有大勢ニハ難成カラン。勇才有勝負ノ仕様ト云ヘシ。如此ノ勝負ノ仕様ヲ聞テ、是ヲ最上是極（セコク）ト思モ又悪シ。時ト所ト其相手ニ分別有ヘキ者欤。兎角ニ勇智有テ其所作ニ不レ疎者ニアラスンバ、如此ノ大功ハ難達カラン者欤。此旨思量仕給ヘ。

一　小神野（ヲカノ）越前ト云者、鑓兵法ノ達人也。然ルニ或時、河端ニ出テ逍遙仕ケルニ、何国共知ヌ座頭坊一人、尻ヲカラゲテ河端ヲ上リ下リ混（ひた）ト礫ヲ打ケル侭、越前不審ニ思ヒ、傍ニ立寄云ヤウ、「如何ニ座頭渡瀬ヲ尋ルカ。渡瀬ハ其辺ニハナシ。此方ヘ来リ侍レ」ト云ハ、座頭云ヤウ、「否（イヤ）、深所ヲ尋侍ル」ト云バ、越前弥不審仕テ、「深所ヲ尋テ何カ仕侍ルソ」ト問ニ、座頭ガ云ヤウ、「何ヲカ包侍ルベキ。身ヲ投侍ル」ト云ハ、其時越前、「夫ハ何故ニカ身ヲ投ヌルソ」ト問ニ、「私十方檀那ヲ勧進仕リ、官ヲ可仕ト存シテ金子ヲ持テ上方ヘ登侍ル所ニ、道ニテ盗賊ニ被執ヌ。是ヨリ可登ヤウモナク可帰ヤウモナシ。所詮身ヲ投死ナンニハ不然ト存成①テ侍ル」ト云ハ、越前聞テ、「扨々不便成コト哉。去ハトテ身ヲ投死モ短慮也。命タニ有バ金子ハ何トソ可成間、先此方ヘ来侍レ」ト云テ連テ帰リ、行々勧進仕テ為執、上方ヘ上セケルニ、座頭カ云ヤウ、「御前ニハ鑓兵法御数奇ト見タリ。我等ノ鑓ヲ伝受仕侍ルベシ。先我等ト仕相ヲ仕テ見給」ト云間、越前彼座頭ト仕相ヲ仕ケルニ、何本仕テモ越前彼座頭ニハ勝コト不成。故ニ、伝受仕タリ。其時座頭カ云ヤウ、「此鑓ヲ跡ニテ鍛錬仕給ハ、弥微妙有ヘシ」ト云テ登ス。其後、越前此鑓ヲ棟摩（ママ）シテ小神野カ一本ノ鑓ト云テ秘蔵セシハ、此鑓也ト云々。

去ハ、此越前、猛心計ニ非ス。慈悲モ有人ト云ヘシ。彼座頭ヲ助タリ。故ニ不招シテ我重宝ヲ得タリ。去ハ、其報ヲ為得トテ慈悲ヲヌ②ルハ、実ノ慈悲善根ニ非スト云リ。昔大唐ニテ梁武帝ト云レ③帝、仏法帰依ノ帝ニテ、四百余ノ大伽藍ヲ建立仕給ヒシニ、其後、達磨大師ニ向テ「朕（チン）ハ四百余ノ大伽藍ヲ建立仕タリ。是大キナル功徳ニ非スヤ」ト宣旨有シニ、達磨「無功徳」ト答給フト云リ。去ハ、越前モ慈悲トモ不思、不（レ）悲レ慈トモ不思。唯理ノ当前ニテ助タル故ニ、不求シテ重宝ヲ得タリ。我モ此一本ノ鑓ヲ伝授シタルニ、実ニ此物語ノ如クシテ可有ト思当所アリ。去ハ、物ノ名人ト被レ言人ニ、偏僻ナル人ハ不可有。能剛（コハ）ク能柔ニ非ンハ、物ノ上手ニモ不可至。此旨了得仕給ヘ。

①成→この文字ナシ（金）。②ヌ→ス（大・金）。③レ→シ（大・金）。

一　櫻井大隅カ次男、櫻井霞之助ト云者アリ。是モ剣術上手也。殊ニ霞カ附位ト云テ、附ルコト得物也ト云リ。然ルニ此霞之助、或時野辺ヘ出ケルニ、座頭通リケルカ、堀ニ一本橋ノ掛テ有ケル所ニ行懸ケルニ、彼座頭我持タル杖ヲ彼橋ノ一方ヘ押当、是ヲ定木ト仕テ何ノ造作モナク、スラ〳〵ト渡越ス。霞之助是ヲ見テ、「我兵法ニテ附ル時ハ、何時モ此心持成ヘシ」ト得心シテ、附位ヲ得

道仕タリト云々。

誠ニ、其道ニ深執心有時ハ、何コトニ不寄得悟スヘキ者也。去ハ、釈迦如来ノ見明星ノ悟ト云テ、極月八日晨明明星ノ出ルヲ見給テ、悟道仕給シト聞テ、明星ノ出ヲ見計ニテハ如何シテ見性悟道成ヘケンヤ。其道ニ深心ヲ掛テ修行スルトキハ、誰々モ其分々相応ニ悟有ヘシ。一概ニ物ヲ心得スルコトナカレ。去ハ、古語ニモ、「勤ヲ無価謂レ宝、慎護身ノ①謂レ符」トモアリ。又、説苑之語ニ、「于レ将雖レ利、不レ得(一)人力。(二)不レ能自断、雖レ有(二)人才、不レ勤(二)学問、不レ能レ到レ聖」。如レ此古語ニ眼ヲ付テ常ニ油断仕給フナヨ。

①ノの字ナシ（金）。

一

寛永ノ比、和州郡山ニハ松平下総守殿在城也。然ルニ、南都エハ其間五十町有ケルト也。扨、奈良ニ薪ノ能有ケル節、郡山ノ侍共ニ見物ニ参ルコト法度ト被仰付タリ。然所ニ、其比年齢十七・八計ナル家中ノ侍ノ子、見物仕度由ヲ云ケルニ、又、知行五百石取ケル若輩者、右ノ若衆ト衆道ノ因有ニ迷テ、「我見物サセンズルゾ」ト云テ、上ニ紺ノ木綿着物ヲ着セ、大脇指計ニ編笠ヲ着、両人如此シテ薪ノ能（採燈ノ為トテ奈良ノ町屋一軒ヨリ薪一把ツヽ取タルユヘ薪ノ能ト云也）為見物、猿沢ノ池ノ端ニ赴ク。然ルニ又、薪ノ能ニハ衆徒ハ太刀ヲ帯、カネノ欓ト云テ、歯ノ一ツアル欓ヲハキテ立テ見物ス。一乗院御門跡モ御見物也。奉行中ノ坊左近殿モ警固仕給フ故、少モ無礼成コトヲセズ。夫故彼者共ニモ「編笠ヲ取候ヘ」ト二・三度モ制シケレトモ、元来忍ケル故カ、忍ケレトモ実カ侍故、何共不思シテ編笠ヲ不脱、不知躰ニテ編笠ヲキテ在シニ、後ニハ警固ノ者共、其編笠打破レサ①ト怒テ来ケレハ、彼若衆脇指ニ手ヲ掛ケルヲ、「推参者打殺」ナド云テ、ハタタト討殺テ後ニ見ケレハ、上ニハ紺ノ木綿着物ヲ着タレトモ、下ニハシユスノ小袖ヲ着タル間、「是ハ定テ郡山侍ニテ可有」ト、興ヲ覚ケルト云リ。

扨、今一人ノ男ハ、何国共不知逐電ス。然ルニ、彼若衆草履取、郡山ニ走帰テ、此由親ニ告タリケレハ、親モ此コトヲ聞テ兎角ノ分別ニモ不及、奈良ニ走着、警固ノ者ニ討テ掛ケル所ヲ大勢寄テ、何ノ造作モナク討伏タリ。「扨是ハ大事ニ成ヘシ」ト、上ヲ下エト騒動シ、春日山ニ引籠ラントス。郡山ニテハ、此コトヲ聞テ我先ニト馳着ケル。其内、南條左平次ト云中小性、十文字ヲ持、歩行ニテ走行。堀部安右衛門ト云者、馬ニテ直鑓ヲ持テ馳行ケルニ、此両人不負不劣互ニ詞ヲ替シ馳行。猿沢ノ池ノ端ニ馳着タルトキ、最早大形引払、一人ヲクレテ行者ヲ安右衛門突伏タリ。左平次ハ法蔵院カ道具持、鞘ニ日月ヲ画タル十文字ヲカツキ、跡ニヲクレテ行トテ木ノ枝ニ引掛、周章フタメク所ヲ突殺ヌ。扨、両人首ヲ取タリ。勿論十文字ヲモ分捕ニ仕タリ。左平次ハ猶進ケルヲ、安右衛門年上ナル間、「深入スナ。今ニ郡山ノ者共大勢可来間、跡ニ引付可働」ト云テ、折敷テ胴勢ヲ待居タリ。奈良方ハ四・五千計勝負ヲ計兼テ不得進ト云リ。

然所ニ、一乗院御門跡ヨリ以使僧、「両人先郡山ヘ被帰侍レ。喧嘩ノ儀ハ以後兎モ角モ御沙汰有ヘシ」ト被仰下ケルニ、両人云ヤウ、「武士ハ覚有時大将ノ下知ナクシテハ不引ノ法也。其段郡山ヘ被仰遣侍レ」ト云テ、其場ヲ不去ト云リ。其後、郡山ヨリ可罷帰由下知有ケレハ帰ヌ。扨又、郡山侍共聞付次第ニ「我モ々」ト馳着ケルニ、下総守殿モ殊ノ外立腹ニテ、「中ノ坊ヲモ手柄次第ニ被討取」ナト宣ヒテ、町口迄出馬有ケルト也。然ルニ、其名字ハ不覚、久弥ト云ケル家老一人馬ニ乗テ馳廻リ、「一人モ奈良ニ行コト不可為」トテ、使番ノ侍ヲ以奈良エ行着タル者ヲモ呼返シケリ。

扨、下総守殿御前ニ来テ云ヤウ、「御立腹ハ去コト也。殿ノ御勢ヲ以テ奈良ヲ討破給ハンハ最易カルヘキナレトモ、乍去以後公儀ヨリ御咎メヲハ如何仕給フヘキ。喧嘩ノコトナレハ、其相手ヲハ定テ討テ出シ侍ルヘキナレハ、御身代ニ御替有テ討破給シ②モ無益コト也。是非々」ト奉留。依之、郡山静リケルト云リ。扨、其

逐電仕タル男ノ知行五百石ヲ南條左平次ニ被下ケルト云リ。又、堀部安右衛門ハ本知行二百五十石ニテ有シニ、百五十石ノ加増ニテ四百石ニ被成ケルヲ不足ニ思ヒ、以後暇ヲ乞テ立退ケルト云リ。扨又「法蔵院カ被執十文字ヲ返テ給侍レ」ト下総守殿ヘ訴詔申ケレハ「南條ニ可言」ト也。其段左平次ニ云ケレハ、「奈良ニテノ働ノ証拠ナルニ依テ返コト不成」ト云テ、終ニ不返。其以後ハ、猶以奈良ノ町ヲ遊行ニハ彼日月ヲ画タル十文字ヲ為持テ廻リケルト云リ。依之、法蔵院気ノ毒ニ思ケレトモ、可為様ナシト云々。誠ニ、此左平次・安右衛門カ働、時ニ相応ト云ヘシ。扨又、一乗院御門跡ヨリ可引返由被仰下ケルニ「大将ノ下知ナクシテ不帰法也」ト云シコト最殊勝也。　権現様未元康ト奉申十九歳ノ御時ニ、今川義元ノ幕下ニテ尾州大高ノ城ニ楯籠給ヒシニ、大将義元桶破間ト去所ニテ討死仕給ヒ、今川方委③ク敗軍ノ由、信長公ノ方ニ水野何某ト云テ　権現様母方ノ伯父也ケルカ、其人ノ方ヨリ告知セタリ。然ルニ、諸人皆大高ノ城ヲ明テ参州ニ帰陳スヘキ由ヲ云ケレトモ　権現様被成御意ケルハ「我伯父ナカラ敵也。必定ナラハ味方ヨリ注進アルヘシ。味方ヨリ不告来以前ニ落散スルコトハ、武ノ道ニ非ス」ト御意有テ去給ハズ。其後、味方ヨリ注進有ケルヲ御聞届、城ヲ明テ帰陳仕給ヒシト云リ。此道理ニ能叶者欤。扨又、久弥カ諫言最至極也。其比、下総守殿ハ未二十四・五才ノ殿ニテ有シト也。左有ハ血気盛ニテ此コトキ有シコト最也。其上、奈良ヨリノ仕方ニ依テ五日・十日過テモ如何様ニモ可成コトナレバ、緩々トコトヲハ可行者也。其上、大行不顧細謹④ト云ハ、久弥カ諫言忠第一ト云ヘシ。此旨一々思量仕給ヘ。

①サ→ナ（大・金）。②シ→ン（大・金）。③委→三本とも共通するが、「悉」であるべきか。④謹→三本とも共通するが、「瑾」とあるべきか。

一　近来、美作国主元祖森美作守殿、官位中将ニ経上給ヒケルニ依テ、森中将殿ト云シト也。然ルニ、近習ノ侍ニ中西又右衛門ト云者有。此者江戸取次役ヲ仕ケルニ、黒田筑前守殿ヨリ使者有ケルヲ取次ケルニ、中将殿「如何被思召ケン、余ノ者ヲ被召、彼口上ヲ聞テ可参」由被仰付ケル。又右衛門於次間云ケルヤウ、「何玄関ヨリ爰迄ノ内ニテ可謂違侍。為御年老給テ、耳カ聞エ給ハサル侭、無差ト仕タルコトヲ宣フ物哉」ト云ケル。中将殿聞給ヒケレトモ、兎角ノ儀ヲ不宣、国本ヘ可参由被仰付、作州ヘ登リケル。以後、於作州此又右衛門、剛勢者ノ常々油断ナキ男成ニ依テ、親キ知音者共四人ニ被仰付、「何トソ以謀可討」ト也。故ニ又右衛門、常々無油断男也ケレトモ、入魂者共也ケル故ニ、吾居間ニテ物語仕ケルトテ、折節冬ノコトニテ、コタツニ火ヲ置当リケルヲ、双方ヨリ両手ヲ執テ、叩テ指殺ケルト也。一男ハ長刀ノ鞘ヲ脱テ出ケルヲ、討留ケルト云リ。又其節、中将殿ニハ他所ヘ出給ヒケルカ、中西ヲ右四人者共ニ謂付レトモ、剛強者、其上子共モ多間無心元侭、可参由被仰付、跡ヨリ侍五人被遣ケルト也。此者共ハ台所口ヨリ入ケルニ、次男ヲハ台ニテ討留ケルニ、三男十三才成ケルカ奥ヨリ刀ヲ抜テ出ケルニ、各務五左衛門ト云者、討テ掛ント仕ケル所ヲ普代ノ下女、兄弟喧嘩ノ①ト心得テ、五左衛門カ後ヨリ抱付ケルヲ、モキ放サントセシ間ニ、三男右ノ肩先ヨリ乳ノ下迄討込タリ。五左衛門ハ倒テ死ス。然ルニ、若輩者故、続テモ不働刀ヲ突、「我ラノ手柄ヲ御覧アレ」ト云所ヲ、討留タリト云リ。然ルニ、其年生ケル男子ヲ乳母カ懐ニ抱テ、何国トモ不知逐電仕タリ。

其後十三年ヲ経テ以後、中将殿遠州浜松ヲ通リ給ヒケル節、何国ヨリカ来ケン、十二・三計ナル童、中将殿ヲ駕越ニ一尺三寸有ケル脇指ヲ以テ突。然トモ、中将殿運ヤ強カリケン、折節駕ノ後ヘモタレテ居給ケレハ、小袖ヲ突通シ、懐ノ鼻紙ノ間ヘ突込タリ。危カリケルコトトモ也。扨、其脇指ヲ突走去ケルヲ、供ノ侍トモ追カケ討留ント仕ケルニ、中将殿、「世怜也。其侭可指置」②宣ヒケルニ依テ、逃去ケルト云リ。扨中将殿、「吾覚可討ト恨ミ思フ

『功名咄』四（中巻ノ下）

ヘキ者ヲ不覚。大形中西又右衛門カ子ニテ可有」ト宣ヒケルト也。其以後ノ説ニ、被乳母カ懐ニ抱テ逃シ子也ケルカ、其後モ志ハ有ケレトモ、身不肖ニテ不叶内ニ、中将殿ハ逝去仕給ケルト云々。誠ニ、此中将殿、主従ノ情ヲ知給ハヽ、何カ度モ被御聞直、又右衛門兎角可云ヤウナシ。又、此又右衛門剛強者ナレハ、万一御用ニ不立兼器量也。然ハ弥被掛情、将ノ謀略トモ可云欤。去ハ、武士ハ一言ノ情ニ依テ命ヲモ捨、一言ノ恨ニ依テ心ヲ変スル様シ、世ニ多シ。此段、中将殿ノ短慮ト云ヘシ。又、中西カ事、君々タラスト云トモ、臣以テ臣タラズンハ有ヘカラスト有時ハ、先堪忍シテ、以後見苦敷思事有ハ、暇ヲ乞テ家ヲ去ンニハ不如。中将殿、又右衛門ヲ討給シコトハ弥以悪レ③。去ハ古語ニ、「千金弩ハ為軽鼠不発機」ト有時ハ、大将タル人ノ覚有少計ノ怒ヲ報給フコトハ小器ノ至也。扨又、其節乳母カ懐ニ入テ逐電仕タル幼子、以後、遠州浜松ニテ中将殿ノ駕ニテ通リ給ヒケルヲ、窺寄テ駕越ニ突ケルコト、若輩者ニハ殊勝成志也。大名ト云、幼雉成者、能々思入スンハ、駕ノ傍エモ難寄カラン者欤。壮年ノ人ニハ不足トモ可云者也。若輩者ニハ志ヲ達タリト可云。

去ハ、震旦ニ豫讓ト云者、主人ノ敵ヲネラヒケルニ、敵是ヲ聞付、却テ豫讓ヲ搦取テ己ニ成敗セントセシカ、余ニ其志ノ深切ナルヲ感信シテ「何ニテモ所望ナルコトモ有ハ可云」ト也。其時豫讓云ヤウ、「何ノ所望モ不侍。但御召ノ小袖一ツ申請度」由ヲ云。「夫ハ何ヨリ以テ安キコト也」ト云テ為得ケレハ、辱トテ請取、吾懐中ヨリ小剣ヲ抜出シ、彼小袖ヲ混突ニ突通シ、「最早思残スコトナシ」ト云テ、被為殺害ケルト云リ。是ヲ誉テ今ノ世迄モ云伝侍レハ、右幼子モ志ヲハ少ハ達シタルヤウニ被思侍ル。又、供ノ武士、彼世悴ヲ追駈討留ントセシヲ、中将殿、「若輩者也。其侭可指置」ト宣ヒシコト、情有テ大器ニ聞侍ル。アハレ此仁愛初ニ御坐有テ、又右衛門一家ノ者トモヲ助置給フ者ナラハ、剛強ノ武士ヲ数多味方ニ持給フヘキ者ヲ、残多シ。去ハ、甲斐ノ信玄ノ詠歌ニ「人ハ城人ハ石垣人ハ堀　情ハ味方油断剛敵」ト詠シ給ヒシコト、最トコソ被思当侍ル。此旨能々勘弁仕給へ。

①ノ→この字なし（金）。②三本共通するが、「ト」が入るべきか。③レ→シ（大・金）。

一

関ヶ原御合戦以後、越前一国ヲ結城秀康ヘ被進シ節、関東ニテ其比名ヲ被知タル程ノ武士ハ、大形越前ヘ被召連ケルト也。其内ニ、栗原善兵衛ト云者モ被召連テ越州ニ経歳ケルト也。此者後ニ男子ニ家業ヲ譲テ其身ハ法体シ、栗原善斎ト云テ、刀脇指ヲモ不指、隠居楽人ニテ世ヲ渡リケルト也。然ルニ、或時此善斉、我門ニ出テ上下ヲ見居タル所ニ、喧嘩ニテ人ヲ討タルト見テ、血刀打振テ走来ル。跡ヨリ四・五人「遁ス間敷」トテ追テ来ル。善斉ハ門ノ地覆ニ立テ「誰ニテモアレ善斉カ家エ駈込カシ。助ヘキ者ヲ」ト云ニ、此喧嘩仕タル者コレヲ聞テ、「真直ニ栗原カ家ニ走込ヘキ」ト志テ、彼善斉カ脇下ヲ走通ル所ヲ、善斉混ト組。彼者被組テ働ク所ヲ、善斉大指ニ聢ト喰付強ク組留テ、跡ヨリ追テ来ル者共ヘ渡ケルト云々。

誠ニ、此栗原ノ武功者也トハ為申トモ、即時ニ能謀テ組留ヌル者欤。今思テ見ルニ、彼者ヲ跡ヨリ四・五人追駈来ル上ハ、迎モ不遁所也。最早可難助ト思量仕テ、謀テ組留ケル者欤。去ラハ、心利タル武士ニハ無刀也ト云トモ、不可為油断者欤。然トモ、其身ニ不帯刀剣ヲ事ハ不レ為レ能①。又寛永ノ比、一刀流ノ中興尾野次郎左衛門殿長男、尾野忠弥殿ト云シ人ハ、病気ニテ御坐在ニ敵持ニテ有シカハ、鉄骨ノ扇子一本ニテ不帯刀剣ト云リ。此心ハ「吾敵持也。自然不慮ニ被討ヌル時ハ、次郎右衛門カ子ナレハ兵法ニ疵ヲ附ヌルコト無本意。無刀ニテ在ル者ノ被殺ヌルハ、兵法ノ疵ニ成マシ。又、兵法不知者一人・二人計来ルトキハ、此扇子ニテモ被討マシ」ト被云シト云リ。是ハ又最ニモ侍ル。去ハ、面々ノ数奇ニハ寄コトナレトモ、吾ハ隠居仕タリトモ、腕ニ叶如ナル刀

脇指ヲ一生ノ間、不レ可レ放レ身ト思フ所也。譬ハ、出家ノ珠数、武家ノ刀剣以テ同シ。此旨思量シ給ヘ。

①「能」の右傍下に「カ」か（底本）、ニハ（大）、ス（金）。

一 万治・寛文ノ比、岡六兵衛ト云者、出雲ノ国主、松平出羽守殿エ新参ニ被召出ケル節、宿ニ晝①寝シテイタル所エ、人一人来。六兵衛眼ヲ開見レハ、何者トハ不知、血刀提テ大息ツキテイタリ。六兵衛少モ不騒、「其方ニハ誰ニテ渡リ侍ルゾ。我等ハ見知不侍。如何様ノ儀ニテカ、我ラ方ヘハ御出侍ルソ」ト云。「結句用心セハ悪カリナン」ト思ヒ、起様ニ吾脇指ヲ足ニテ遠ク押ヤリ、起直テ問ニ、彼者云ヤウ、「我ハ何ノ何某ト申者也。人ヲ討テ立退侍ル。隠テ給候ヘ」ト云。六兵衛云ヤウ、「左有其綴蘿ノ陰ニ御隠御坐在ヨ」ト云。其時、早跡ヨリ鑓長刀ニテ追駈来。六兵衛カ門ノ内ヘ入、「是エ走込タリ。可出」ト也。其時、六兵衛モ鑓ノ鞘ヲ脱出向、「是何事ニテ侍ルソ。夥敷体也。如何様ノ儀ニテ侍ル」ト云ハ、「何ノ何某ト云者、人ヲ討テ是ヘ走込タリ。出シ給ヘ」ト云。其時、六兵衛云ヤウ、「吾ハ新参者ニテ誰ヲ誰トモ不知。左ヤウニ剛儀ニテハ出スマジ」ト云。其時、追手侍共、「如何ニモ最至極也。出シテ給レ」ト云ハ、六兵衛、「吾新参者ナレハ誰ニヨシミモナシ。好モ無之者ヲ隠シ侍ルモ不忠也」ト云テ、和睦ニテ出シヌル筈ニシテ、彼者ニモ其段云聞セ、其夜寺ニテ切腹セシ時迄、種々馳走仕ケルト也。彼走込ケル者ハ、常々誹諧数奇ニテ有シカ、六兵衛ト終日誹諧ナト仕テ、句ノ善悪ヲ吟味シテ、日暮シケルト云ヘリ。扨介斯（かいさく）ヲ六兵衛ニ頼ケルニ「常々御親ミノ御知音ノ衆有ヘシ。其人ニ御頼アレカシ」ト辞退シテ不為ト也。彼者寺エ行ニモ六兵衛駕ノ傍ニ附テ行シ。彼者辞世ヲ仕ケルカ、寺ニテ切腹ノ砌迄、彼是ト句ノ吟味シテ切腹セシト云ヘリ。其後、六兵衛此事ヲ兎角気ノ毒ニヤ思ケン。暇ヲ乞、牢人仕ケルカ、頓テ備前ノ少将殿エ在附ケルト云々。

『功名咄』四（中巻ノ下）

誠ニ、此六兵衛モ能シタリ。是程ニモ大形首尾ヲ合スル者希ナラン。乍去、武士ノ本意ヲ不知ト云ヘシ。去ハ、如此働ヲハ当世ノ利口者ノスル業ト可知。去ハ、不知二唐土一、我朝ニハ昔ヨリ武士タル者ノ家エ走込メル者、五逆罪ノ者ハ不知、出シヌルコトヲ恥辱トス。今是ヲ思テ見侍ルニ、万一此六兵衛カ如ク人走込タル時ハ、跡ヨリ追駈来ル者ニ出向、何ト走込タリト云トモ「我等所エハ不来」ト云テ争ヘシ。譬「見タリ」ト云者有共、去ハ必定走込タリトモ、武士ノ作法ナレハ一命ノ限ハ出ス間敷ニ、「素ヨリ我等所エハ不来者ヲ何トシテ可出ヤウヤ有」②云放シテ構ヘカラス。自然、追手ノ者トモ、「左アラハ屋サカシセン」ト云コト有ハ、「我等所ニ不穏置、証拠ニ見セ申度コトナレトモ、走込タル者不為居モ所ヲ、剛儀ニサカサレケルト云ハ、猶以可為恥辱。是モ御免有、一命ノ限ハ不可罷成。近比ナル横難出来クル者哉。扨々、覚有迷惑ナルコト各ニモ御了簡侍レ。侍ニ恥辱ヲアタエ給ンヨリ、彼者ハ定テ何方エソ退行ナン侭、急テ追駈給ヘカシ」ト云テ、出スヘカラス。万一公儀ヨリ其身ヲ召捕テ、跡ヲ闕所有テ引出シ給ハンハ不知、不可出ハト思フ所也。是等誠ニ武士ニ生レタル者、横難不運ト思定テ事ヲ執行ヘキ者也。武士タル者、頭ヲ被討タル者、夫程ノ痛ミニハナケレトモ、其恥辱ヲ為雪（すすぐ）失一命、是日本ノ武士ノ定法也。走込モ是ニ等キコト也ト思量仕給ヘ。但シ、覚云ハトテ一概ニハ定ヘカラス。其所ヲ能々了得仕給ヘ。

①晝→晝（大）、昼（金）。②「有」の下に「ト」（金）。

一 寛永・正保ノ比ヲヒ、堀田加賀守殿エ花義（ハナキ）外記ト云者ニ①新参ニ被召出タリ。然ルニ外記、五・三日過テ御広間番ヲ相勤ケルニ、近所ノ大名衆ノ家来喧嘩ニテ人ヲ討テ、加賀守殿玄関エ走込タリ。其時外記立向テ、「何者ニテ侍ル」ト問ニ、「吾ハ何某ノ家来ナルガ人ヲ討テ参タル。隠シテ給候ヘ」ト云。外記、「左有ハ小玄関ヘ廻リ給ヘ」ト云テ、陰エ引廻シ様子ヲ聞テ、吾草履取ヲ付テ、

吾多門エ遣シ、則吾駕ニ乗テ、加賀守殿御城下総州佐倉ヘ遣シケル。然ルニ、彼大名衆ヨリ使者ヲ以テ、「我等ノ家来人ヲ討テ参タリ。被成御出被下候ヘ」ト也。其時、外記出向、「左様ノ者、当屋敷エハ参不侍。常々加賀守無御如在御間ト申シ、殊ニハ御近所ノ儀也。何レニ隠シ置侍ルヘキ」ト云。是非云々。「御門エ走込侍ルト云ヘトモ、私儀ハ今朝ヨリ当番ニテ此玄関ニ罷在侍ルカ、左様ナル者ハ参不侍」ト返答ス。此走込ヲ相番ノ者モ不知ト也。加賀守殿ヘハ申上ケルト也。此故ニ、加賀守殿屋敷ニモ其沙汰ナシ。年経テコソ此様子ヲ諸人聞シト也。此故ニ、加賀守殿懇ニ被召上、次第ニ立身仕テ、後ニハ御子息上野介殿御護ニ被附ケル。然ルニ、上野介殿、未若年時分、何方ヘ哉覧、被成御見舞ケル節、此外記モ御供ニ参ルニ、比ハ夏ニテ伊達陸奥守殿近所ノ橋ノ上ニ、伊達殿ノ歩行ノ者涼ミテイケルヲ、上野介殿先供ノ歩行ノ者突当テ、橋ノ下ヘ突落タリ。然ルニ、兎角ノ沙汰ナク先エ御見舞有テ、又彼橋ヲ通帰給ハンハ、陸奥守殿ノ前ヲ通給ヒシニ、彼歩行者被突落タル意恨ヲ散セント一人出ケレハ、傍輩ノ者共是ヲ間②テ見続ントテ一人出、二人出シ程ニ、後ニハ五・六十人ニ成テ、上野介殿ノ帰ヲ待居タリ。外記此段ヲ礑ト思出シ、「御駕陸奥守殿ヘ」ト云テ、外記、伊達殿玄関ヘ行向テ、「堀田上野介ニテ侍ル。御門前ヲ通リ侍ル侭、御見舞申入侍ル」ト云。其比、加賀守殿全盛ノ時分ナレハ、「是何故ニカ見舞給ラン」トテ、饗応給ヒシ。外記モ座席ヘ入テ家老ニ対面シテ、四方山ノ物語及数刻、外記云ヤウ、「扨、只今上野介是ヘ御見舞申上ル儀、別ノ儀ニ非ス。今朝御近所ノ橋ヲ上野介通リ侍ル節、御家来衆ト見ヘタル仁ヲ、先供ノ者突当テ川エ落給ヒタリ。其意恨ヲ散セントヤ被思ケン。彼橋ニ上野介ヲ待懸テ五・六十人居給ト見ヘタリ。上野介今朝召連タル者共ハ皆交代シテ、唯今一人モ不居レ待③。屋敷ニ罷帰テ兎角ノ御相談ヲハ可仕間、先々彼衆何モ御呼入給リ候ヒカシ」ト頼ケレハ、家老ノ者驚テ「其迄モ不待④、扨々、上野介様エ慮外千万ナル義、悪キ奴原哉。陸奥守家侍ハ安躰ナル義ハ侍シ」ト云テ侍ヲ申付、早々呼入サ⑤ルト也。扨、家老ノ者云ヤウ「最早一人モ居不侍。不被成気遣、被成御帰候様ニ被仰上侍」ト云ハ、外記一礼ヲ云、上野介殿御供仕テ帰ヌト云々。

誠、智ハ万代ノ宝トハ加様ノコトヲヤ可申。此段能々腹ニ味テ勘弁シ給ヘ。

①ニ→ヲ（大・金）。②間→聞（大・金）。③待→侍（大・金）。④待→侍（大・金）。⑤サ→ケ（大・金）。

一(1)元亀・天正ノ比、常州茨城郡笠間ノ城主ヲハ笠間心休、其子ヲ左衛門殿ト云ケル。元来宇都宮ノ幕下也。〔但シ、元来ハ清原氏、宇都宮ノ鹿子家也ト云リ〕然ルニ、武勇達人ニテ、其比諸方ノ大名衆云合テ、同日ニ笠間エ責入シコトアリ。然トモ、笠間ノ領分三万余石ノ内エ不入立、敵ヲ追返シケル程ノ勇功也ト云リ。又笠間西筋中郡（チウクン）ト云所ニ、増古殿ト云テ、是モ宇都宮ノ一族紀氏ニテ幕下也。然ル所ニ、笠間領門毛（カトケ）村ト増古領飯田村・猪野村ト山ノ界目ヲ争、棒打ヨリ事発テ戦コ①トハ成ヌ②トカヤ。〔一此両家、宇都宮ノ家族ニテ、増古ハ続近ケレトモ、宇都宮曽依不播③、増古立腹シテ、田野、山本両郷ヲ結城晴朝エ献シテ、幕下ニ属ス。依之青柳肥前・舘出雲両人ヲ大将トシテ二百余人笠間ニ被遣、日夜攻戦ケルト也。〕

①「コ」の字なし（大・金）。②ヌ→ス（大）。③搖→構（大）、なお、該割書は「金」にはナシ。

一(2)其前モ数度戦テ、雌雄互ニ難分。然ルニ、此（ころ）ハ五月廿五日ニ、笠間方橋本村ノ取出ヲ預ケル屋中玄番〔此玄番モ数度ノ勇功有テ近国ニ名ヲアラハセシ者也ト云リ。指物ハ黒地ニ白キ五輪也〕、其子孫八郎ト云者、堺目ニ居セシ侍共、雑兵八百計ヲ卒シ、茶臼山ノ麓ニ矢原ノ足入ヲ前ニ当テ備タリ。増古方ハ、都宮村ノ取出ヲ預ケル加藤大隅〔此大隅親子共、武勇ノ誉有シ者也。以後ニ、大坂秀頼公エ被召出、大坂ニ籠城シテ討死セシト云伝リ〕田野村ノ取出ヲ預ケル加藤大内蔵ト云者〔但シ是ハ右ノ大隅カ子也〕、両人近辺

ノ味方ヲ相催シテ、雑兵二千計、是モ彼足入ヲ前ニ当テ飯田村ノ畠岸ニ備タリ。

然ルニ、加藤カ謀ニ、兼テ茶臼山ノ後ハ岩瀬村ト云テ増古領ナレハ、相図ノ武見ヲ上ケ置。笠間方籏本勢ツヽカハ、黄ナル吹抜ヲ振シ、籏本勢不続ハ赤キ吹抜ヲ出ト、兼テ約諾シテケル。然ルニ笠間勢ノ跡、出家・町人為見物トテ大勢出ケルト也。又増古方ヨリ時ノ計略ニ、流星（ヨバイホシ）ノ指物ヲ指タル武者一騎、何ノ用トモナク南ノ山鼻ヘフラ〳〵ト廻シケルヲ、笠間方ニハ是ヲ不審シ、疑シゲニ混ト是武者ヲ見居タル所ニ、茶臼山ニ赤吹抜ヲ出タリ。此時、加藤大隅、笠間勢ノ後見物ノ中エ人ヲ廻シテ云セケルハ、「皆見物ト見ヘタリ。只今合戦ヲ初侍ル。怪我モ有ヘシ。過（あやまち）シテ此方ヲ恨ヘカラズ」ト云遣シケルニ依テ、一度ニ崩テ退ケルニ、大隅ハ右ノ端ニ立、大内蔵左ノ端ニ立テ、軍勢ヲ下知仕、ヱイヤ声ヲ出シテ、彼積悪ノ地ヲ押越テ掛ケルニ、笠間方見物ノ者ノ大勢崩テ引ケルニ気ヲクレシテ、雑人共モ端々引ケルヲ、玄藩・孫八郎諸兵ヲ折敷セ、鑓ヲハ合ケレトモ、タマリモナク被突立ケル。屋中玄藩・同孫八郎、味方ヲ下知シ馬ニテ乗廻々引退ケルニ、玄藩追来ル敵ヲ三度迄馬ヲ入テ乗刻。扨孫八郎カコトヲ無心元ヤ思ケン、尋ケレトモ不逢ト也。然ルニ、和尚塚ト云塚ノ陰ニ仁平因幡ト云者、同源七郎ト云者、兄弟隠居テ玄藩ヲ鑓ニテ突落シ、首ヲ捕ケルト云リ。孫八郎ハ爰ニテ先エ退ケル故、不知之ト也。孫八郎、馬ヲ乗廻々引乗ケルニ、其比根小屋ノ殿ト云、笠間殿ノ御次男十六才成給ヒケルヲ、中郡境ノ大将分ニ越給シ。殿如何仕給ヒケン、馬放シ給ヒ、真中村ノ井溝ノ山際ニ有ケル中ニ、只匍廻（ハイ）給フカ如ニテ居給ヒケルヲ、孫八郎是ヲ見テ頓テ馬ヨリ飛テ下リ、中ニツカンテ指挙、我馬ニ奉乗、帯太刀ヲ抜テ、馬ノサンズヲ混打ニ打テ追遣ケレハ、「平次縄手」ト云テ、八・九町有ケル縄手道ヲ、真直ニ笠間ノ方ヘ退給ケルト也。其①ヨリ孫八郎ハ歩立ニ成テ平次畷引退ケルニ、笠間勢爰ニテ被討者不知数也。孫八郎モ希有ノ命助リ、衛②引退ケルト云リ。然トモ、孫八郎カ功ニ依テ、根小屋ノ殿ヲ助奉リシコト莫大也。依之、親ノ名ヲ御付被成、屋中玄番トソ名乗ケル。然ルニ、此玄番其歳十八才也ケレハ、武功モ未敷（イマダンキ）侭無心元ト云テ、江藤美濃ト云老功ノ者ヲ御越有テ、橋本ノ本城ニ居置、屋中玄番コトハ二ノ曲輪ニ被置タリ。玄藩内心ニハ此コトヲ無念ニ思ヒ、故玄番カ如ク功ヲ達ンコトヲ思ヒシト也。

角有所ニ、笠間ノ籏本ニ安達大膳ト云者有。此者ハ故玄番カ為ニハ甥、当玄番トハ従弟也。故ニ此コトヲ共ニ無念ニヤ思ケン、訴詔ヲ仕テ、比③中郡境ニ来リヌ。又、敵ノ増古殿ハ元来宇都宮ノ一家紀氏也。笠間モ宇都宮ノ籏本ナレハ、互ニ傍輩ノ如クナル間ニテ、角有諍論出来ヌルヲ少モ構給ハセ④ルコトハ無由儀也ト恨給ヒ、田野・山本、都宮二ヶ所ノ⑤結城殿ヘ指上、結城ノ幕下ニ属シ給フ。故ニ、結城ヨリ舘ノ出雲、青柳肥前、其名ヲハ不覚〔中田カ〕、丹後ナト云老功ノ武士ヲ大将分トシテ侍二百騎、足軽四百人、都宮ノ取出ニ籠置給フ。田野ノ取出ハ水谷伊勢〔法名万流斉トモ云〕ト云テ、当世備中中松ノ城主水谷左京亮殿ノ先祖、雑兵二千計ニテ楯籠給フ。加藤大隅・同大内蔵ハ、岩瀬村ヲ城ノ如ニ堀ヲ構テ居住スト云リ。

然ルニ、屋中玄番・安達大膳謀ヲ以テ、「何トソ故玄番カ弔合戦ヲ仕テ、去年ノ恥ヲ雪ント思立ケル故、謀ヲ以テ戦ニハ」ト云テ、磯辺・宮屋、中村ノ内、諏訪ノ峰ト云山奥、中村ト云在所、此三ヶ所草ヲ伏テ〔〇関東ニテハ伏兵ヲ草ヲ伏タルト云リ〕、玄番・大膳、五月廿四日ノ朝、歩行者二百計ヲ引テ敵地ニ発向シ〔此合戦、玄番十九才、大膳十八才トモ云リ。又ハ大膳二十才トモ云リ。不分明〕、此二百計ヲモ五十人ツヽ爰（ここ）彼（かしこ）ニ隠ヲキ、岩瀬村近辺迄纔ニ拾余人召具シ、馳行ノ所ニ、二十才計ノ女ノ小角豆ヲ摘ミニ出タル所ヲ、足怪⑥ニ、三人ヲ遣シ、是ヲ擒ニシテ泣叫ヲ引立来ル。

岩瀬村ニ是ヲ聞付、二・三人駈出シケレハ、味方ハ四・五人ニ成

テ引テ来ル。敵追々五・六人出ケレハ、味方ハ七・八人ニ成ケル故、岩瀬村ニ早鐘ヲツイテ騒動ス。都宮村ニモ早鐘ヲツイテ駈出ケレハ、敵次第ニ大勢ニ成テ雑兵二千計、我劣ラシト追駈来ル。味方モ爰彼ヨリ顕出ニ、二百余人ヲ玄番・大膳少モ不乱ニ引退ケル。玄番、軍勢ヲ乗廻下知シテ引ハ、大膳跡ニ馬ヲ立テ敵ニ馬ヲ不為入。大膳、軍勢ヲ乗廻下知仕テ引ハ、玄番跡ニ踏留テ馬ヲ立。互ニ替々如此シテ引退ケルマヽ〔加藤大隅・同大内蔵親子ハ増古籏本ニ行〕、舘出雲・青柳肥前・丹後ナト云流石ノ武功ノ者共、馬ヲ入テ駈乱シテ討セントセシカトモ、終ニ馬ヲ不為入ト云リ。又、右ニ伏セシ草ハ相図ノ鉄炮ヲ三ツ打ヘシ。左有、磯辺宮・諏訪ノ峰ヨリ駈出ヨト也。真中村ニ伏セシ軍勢ハ此合戦ニ不構、山ヲ隔直ニ懸テ都宮ノ城ヲ可乗取ト云約諾也。

然ルニ、大膳・玄番、敵ノ軍勢ヲタブ〳〵ト引請、鉄炮ヲ打ケレトモ、草是ヲ不聞付シテ不起立、味方モ次第ニ危ク見ヘシ。然トモ、両人乗廻々下知シテ少モ不乱引ケルニ、櫻川ノ末、玉影ノ橋ト云テ溝川ノ有ケル所ニ至テ、舘出雲一騎乗向テ云ヤウ、「玄番・大膳因果ト云物ハ無是非物也。去年ノ今日、親玄番ヲ討取タリ。其モ不替、今日其方共ヲ討取ナンコトヨ。彼溝瀬ヲハ越セマジキ者ヲ」ト云ケレハ、大膳云ヤウ、「去ハコソ因果ト云者ハ無是非者也。今日又日モ不替、其方共ヲ討取ヘキコトハ。彼山ヲ見ヨ」ト云テ、諏訪ノ峰ヲ指ケル。敵モ是ヲ無心元ヤ思ヒケン、諏訪ノ峰ノ方ヲ見ケル折節、草伏タル者共相図ノ鉄炮ハ不聞シテ在シカ、余リ時刻ノ遅カリケル侭、先ニ何ヤラン竹ヲ刻タル如クナル音ノシケル。自然、鉄炮ニテヤ有ラン。「闘ヲ挙テ見ヨ」トテ挙ケルカ、大膳指ケルト一度ニ、蚊ノ鳴立タル如ク挙合ケルソ冥加ナル。磯辺宮ニモ、漸此闘ヲ聞付ヲ⑦トキヲ合ケル。

依之、敵ノ軍勢足ヲ空ニ成テ洋（タヽヨヘ）リ。此時、出雲・肥前・丹後ナド云者共、鞍立スカシ腹帯ヲシメケレハ、大膳・玄藩モ鞍立スカシ腹帯ヲシメケルト也。此時、味方ノ二百余人競テ敵中ニ駈入ラントセシヲ、玄番・大膳制シテ馬ヲ乗廻々、「我々カ馬ヲ入ナンヲ相図トシテ討ヘシ」ト云テ、味方ヲ謐（シツメ）ケル。然ルニ、諏訪ノ峰・磯辺ノ宮ノ軍勢、両方ヨリ近寄テ、一町五畝斗モヤ有ラント思フ比（ころお）ヒ、玄番・大膳馬ヲ入テ敵ヲ竪横ニ乗刻ケル。敵是ニ矢⑧途所ヲ、味方競テ追討ニセン⑨程ニ、被討者不知数ト也。都宮ノ城迄追討ニセシニ、敵ニ一返モ不為返ト云リ。其故ハ、敵ノ可返ト思ノ所ニテハ、両人馬ヲ入テ駈乱テ討シト也。玄番、舘出雲ニ渡逢テ詞ヲ替ケレバ、出雲モ玄番モ馬ヲ乗放テ太刀打仕ケルニ、出雲ハ五十余才ノ男ナレトモ武勇ノ誉有者也ケレハ、暫戦テ玄番衛⑩討伏タリ。首ヲハ下人ニ為持駈行ケル所ニ、去年、父玄番ヲ為討ケル弟源七郎ニ出逢ケル。玄番、盲亀浮木ウドン花（ケ）ノ花、侍⑪得タル心地シテ馬ヨリトビ下リ、太刀打合スルト等クトビ込テ、生捕ニ仕タリ。大膳ハ此戦ニ首四討捕タリト云リ。都宮迄追詰ケレトモ、先ヘ落延タル兵⑫、其城戸ヲ閉テ防ケル故、追留ヌ。又、真中村ニ伏タル軍勢ハ、相図ノ鉄炮ハ不聞、今ヤ遅シト侍居タル計ニテ、終ニ此戦ヲ不知シテ不起立ケレハ、都宮ノ城不乗取コト、残多シト也。去ハ、其日ハ取分ヶ朝霧ノ深カリシ故ニヤ、鉄炮不聞ト云リ。源七郎ヲハ玄番宿所ニ帰テ首ヲ刎ケルト云リ。是ヲ小角豆摘ノ戦ト云リ。

①其→夫（金）。②衛→漸（金）。③比→此（大・金）。④セ→サ（大・金）。⑤ノ→ヲ（大・金）。⑥怪→軽（金）。⑦ヲ→テ（大・金）。⑧矢→失（大・金）。⑨三本とも共通するが、「シ」とあるべきか。⑩衛→漸（金）。⑪侍→三本とも「待」だが「待」とあるべき処か。⑫兵→大・金とも「兵」の下に「共」がつく。そのかわり次の「其」が共にない。

一(1)或時、安達大膳・屋中玄番、味方軍勢雑兵七百計ヲ卒シテ、敵ノ領分飯田村ヲ越テ猪野村ニ趣ヲ、敵軍モ雑兵千計ニテ出向、互ニ詰寄、已ニ一戦ヲ初メントセシ所ニ、敵ノ後ノ山越ニ都宮ノ方ヲ

見レハ、敵二千計ノ軍勢ニテ押来ル。其時、大膳、玄番ニ向テ云ヤウ、「アレ見給ヘ。敵軍後ヨリ大勢ニテ押来ル。一戦遅々シテ後ノ敵軍一所ニ成ナハ悪カリナン。又不戦シテ引取トモ大勢討ルベシ。所詮、後ノ軍勢不押詰間ニ、一合戦シテ可引取間、先我等馬ヲ入ヘシ。其時敵騒動セン所ヲ突テ懸リ給ヘ」ト云テ、大膳鞍立ス。スカシ腹帯ヲシメ、敵ノ真中ヲ乗刻、右ノ方ノ平山ノ中段ヘ廻テ、又鞍立スカシ腹帯ヲシメ、敵ヲ十文字ニ乗刻タリ。此騒動ノ所ヘドツト突テ掛リケレハ、敵一支モ不為崩ケル。味方首ヲ捕コト四ツ五ツト云リ。其時、玄番・大膳馬ニテ敵味方ノ間ヲ乗分、早々引揚ル。然トモ、敵モ烈ク追駈来所ヲ、大膳味方ヲ下知シテ引、玄番返シテ馬ヲ入ル。大膳返シテ馬ヲ入レハ、玄番軍勢ヲ下知シテ引。扨飯田村ヲ引越テ門毛村ノ下流ニテ、一町余ノ田切畷道一筋有。上下エ廻ル道モナケレハ、可為様モナシ。然ルニ、大膳・玄番、「爰コソ我々カ討死スル所ヨ」ト云テ、総勢ヲハ次第ニ静ニ引越セ、玄番敵ノ追来ル道ニ鑓ヲ伏テ、敵追来ヌレハ追払々々スル。敵二十・三十共集来ルヨハ、大膳馬ニテ駈破テ、右ニヒラキ左ニヒラキ、爰ヲ詮度ト防ケル。其間ニ味方漸畷道ヲ引越タリ。其時大膳、玄番ト一所ニ成テ、畷道ヲ静ニ馬ヲ歩ヒ①引越タリ。夫ヨリ敵モ得慕ハサリケレハ、爰ニテ軍勢ヲ謐テ引テ帰リケルト也。

①ヒ→セ（大・金）。

一(2)又或時、安達大膳・屋中玄番、味方ノ軍勢ヲ卒シ、敵ノ領分青柳村ヲ押越セリ合ケルコトアリ。然ルニ、青柳村ニモ惣構ニ大木多茂（シケリ）リ、又向ニ熊野宮ト云森茂リ、其間ニ二・三間ノ道一筋有ケル侭、空ハ一面ニ茂相タル所也。其所ヲ追ツ返ツ両三度ノセリ合有ケルニ、大膳如何仕タリケン、指物ヲ木ニ引掛テ落タルヲ不知シテ引退ケルニ、跡ヨリ其名字名ハ不覚、是ヲ拾テ来ル者アリ。大膳カ指物ハ紿二幅ニ長サ八尺ニシテ五輪ヲ黒ク、五輪ノ内ニ安達大膳ト我名名字ヲ白ク顕タル指物ナレハ、紛ナクシテ、流石ノ大膳ホトノ者、指物ヲ捨テ引カト（ののしり）ケレハ、大膳是ヲ見テ一騎取テ返シ、「吾指物ノ落タルヲ不覚シテ引退タリ。申請度」由ヲ所望ス。彼武者、「安キ儀也。可遣」ト云。其時大膳、「左有ハ迚モノ義也。指テ給候ヘ」ト云テ為指ケルニ、彼武者モ大膳ヲ怖敷思ヒ、大膳モ彼武者ヲ怖敷思ナガラ為指ケルニ、互ニ情有テ不討ト也。扨、大膳一礼ヲ云テ引退ケルト云リ。其指物于今安達ノ家ニ相続シテ持伝タリト也。

去ハ、此大膳ハ十八歳ヨリ廿七才迄、中郡筋敵ノ堺目ヲ不去、数度ノ戦ニ終ニ臆シタル色ナク、屋中玄番ト両人ヲ①戦度ニ、数度遂功名ケルト云リ。此外ニモ、毎度ノ高名有シカトモ、端々計ヲ聞タルハ不被書也。然ルニ、大膳・玄番、終ニ手ヲ不負ト也。誠ニ、冥加ノ武士也ト、世人モ云伝タリ。去ハ、増古方ノ武士一人、此大膳ヲ討取ント心懸、鉄炮ヲ以テ二・三間ニテ両度迄打ニ不中。又或時大膳、月毛ノ馬ニ乗テ引退ケルニ、跡ヨリ烈ク追掛、三間余有ケル一ツ橋ノ所ヘ追詰タリ。然ルニ、大膳彼一ツ橋ヲ何造作モナク駈渡テ引退タリ。此後、彼武士云ヤウ、「扨々無類ナル武士哉。彼ヤウナル冥加ノ武士ヲ討取ナハ、却テ為身悪カリナン」ト云テ、其後ハ不心懸ト也。

①ヲ→シテ（大・金）。

一屋中玄番、老後ニハ、永井右近殿エ被召出行ニ、城州淀エ登リ、淀ニテ病死仕タリト也。然ルニ、浅野采女正殿家来、稲川角兵衛ト云者ハ、此玄番カ姉ノ子ニテ甥也。扨、大坂帰陳有テ以後迄モ、玄番ハ在所橋本ニ引籠テイタリケルカ、此角兵衛、大坂陣ニテ塞（フサ）手（イテ）帰ケレハ、玄番殊ノ外ニ悦着シテ、「其方事今度天下別目ノ合戦ニ逢テ首尾能段、於吾満足シタリ。此以後何ケ度モ大事ニ可逢侭、語聞セ可申」トテ語ケルハ、「其方モ聞及ツラン。先年我馬ヲハ根小屋殿ニ奉リ、吾ハ歩行立ニ成テ平沢縄手ヲ引退ケルニ、

ヲクレ軍ニテ有ケレハ、我後ニモ何十人カ有ンニ、両方ハ深田ノ、殊更五月末ナレハ深泥ナリ。道ハ細シ。先ヘ退行者共急トスレトハカ不行ケレハ、敵追詰、味方ノ具足ノ上帯ヲツカンテ、引倒シテ首ヲトレトモ、一人トシテ返シテ戦者ナク首ヲ被捕ケル。故ニ、次第ニ被討テ最早我後ニ二・三人ニ成タリ。是ハ如何スヘキトモダユル様ニ思ケレトモ、可為様モナク、又四・五間行ハ広キ畠ニ出ル所也。最早押付我等カ被引倒番ニ成ヌト思ヒ、無是非前ニ立タル男ノ上帯ツカンテ引倒シ、先ヘ抜出、彼男ノ首ヲ敵ノ捕間ニ、又先ナル男ヲ引倒シ、先エ抜出筋違ニ一間計飛テ、畠岸ニ飛付タリ。夫ヨリ広ミュ①出ケレハ、吾自躰達者ニハアリ、人先ニト引退テ、希有ノ命ヲ助（たすかり）ケル。今是ヲ思テ味方ヲ助ルコソ武士ノ本意ナルニ、覚有振舞、臆病ナル働、於レ今面目ナク、兎角ヲ可云様ナシ。然トモ、人モ不知之コソ、其沙汰モ其方ナラテ終ニ人ニ不語。去ハ武士ハ強計ニテモ不成。命生タレハコソ、次ノ年親ノ弔合戦ヲモ仕テ本望ヲハ達ツレ。其方ハ若者也。角有働コソナカラメ。命ヲ全シテ遂高名ヨト云シハ、此所也ケンカシ。其段心得給ヘ」ト語リシト云々。

①ュ→ェ（大）、ニ（金）。

一元亀・天正ノ比ヲヒ、蒲生忠三郎殿ト申ケルハ、初ハ江州日野谷ト云所ニテ、二・三万石ノ領主タリシカ、後ニハ蒲生飛騨守氏郷トテ、奥州会津ニテ百万石ノ領主ト成給シ也。此人若年ノ時分ヨリ、武勇勝レ給ヒ、新参者ヲ被召出テ被申ケルハ、「毎モ戦場ニテハ吾家中ニ鯰尾ノ冑ヲ着タル者アリ。此者ニ不劣ヤウニ働ダニスレハ、別事ナシ」ト宣ヒシ。彼新参者ハ「鯰尾ノ冑着タル者ハ誰ナルラン」ト思ヒテ居ケルニ、戦場ニテ見ニ忠三郎殿ニテ有シトカヤ。扨、鑓前ニ成テハ、毎度忠三郎殿一番ニ鑓ヲ入初給ヒシ。然ルニ、直ニ懸ハ余リ早過ルニ依テ、敵味方ノ備ノ間ヲ筋違ニ懸テ惣勢ヲ引付、敵ヲ追崩シ給ヒシト云リ。又或時、氏郷戦勝給テ、将机ニ腰ヲ掛テ居給ヒシ所エ、家来ノ侍二人首ヲ持テ来リ。「一番首ニテ侍ル」ト云ハ、今一人ノ侍「否、一番首ハ我ラニテ侍ル」ト云諍ケレハ、氏郷宣ヒケルハ「不可諍。吾能見タル上ハ」ト宣ヒシ間、両人不諍シテ御前ヲ退去ス。其時一人ヲ呼返給ヒテ、ヤタテニテ順礼歌一首ヲ書テ被遣ケリ。其歌ハ「普陀楽ヤ岸打波ハ三熊野ノ　那智ノ御山ニ響ク瀧津瀬」ト云歌也。此侍、「是ヲ以後ノ証拠ニハ如何」ト思ナカラ取テ帰リ、能々思量仕テ見ハ、先一番ニフダラクヤト謡、是ニテ給ヒシトハ以後コソ思当ケルト也。誠ニ、名将ノ機転、凡智ノ所及ニ非ス。扨又、何ノ家ニカ此短冊ヲ持伝テ有ラン。扨々覚有物ヲ武家ニハ功勝ニ一ツ成トモ残度者也。